

1. 古スコマニア

1-1 古スコ

一般のひとからみると、天体望遠鏡を欲しい、買いたいという人は、変わり者と思われるかもしれない。星を見たいという人は少なからずいるが、天体望遠鏡を買ってまで星を見るという人は少ない。望遠鏡が高いということもあるかもしれないが。使うのも案外めんどくさい。天文台の観望会や有志が望遠鏡を持ち寄る一般向け観望会で、見せてもらうのが簡単だが、それを好まない人や、それに満足しない人も少なからずいる。だいたい、簡単にできることはなかなか趣味になりにくい。

古スコとは、古いテレスコープの略である。

古いものを英語ではアンティーク、ヴィンテージ、クラシックとか、だいたいの年代を連想させるものから、オールドとかレトロとか感覚的で曖昧な言い方までたくさんある。日本語で「古い」という言い方はすべてを丸め、その上に中古（ユーズド）と言う意味付け加えられ、大括りでいうのにたいへん都合のいいものである。それに気がつき「古スコ」というようになったのは、サイトを作った 2004 年前後と思う。同じように呼ぶ人が増え、2022 年の星フェスでは。「古スコ懇親会」なるものができ。挨拶もさせて頂いた。

まあ、造語と言っても簡単な組合せなので誰でも思いつくものかもしれないが、それが天文マニア界というニッチな世界であっても、市民権を得たということは大変うれしい。

20 紀後半、1957 年のソ連の人工衛星ソユーズ打上から、米ソ宇宙開発競争に端を発した宇宙ブームが世界的に巻き起こった。高度成長期でもあった日本の各メーカーは望遠鏡を売り、世界中の多くの少年たちは

天体望遠鏡を買い、宇宙に夢をはせた。その主役は日本の望遠鏡メーカーであった。後にそのあたりはまた説明するとして、その時代の望遠鏡は世界中の物置に眠っており、次の使い手を待っている、と言いたいところだが、実際はどんどん廃棄されている。悲しい事だ。

ただ、当時宇宙ブームに歓喜した世代（昭和 40 年くらいまでに生まれた人々）は、ほとんどが子育てを終え、自分の趣味を持てる年代になっている。

また、インターネットの普及で、当時は欲しくても買えなかった望遠鏡の情報が明らかになり、またオークションやリサイクルセンターで簡単に手に入る時代が到来した。2,000 年頃から、世界的に天文愛好家のコミュニティが盛んになり、それと共に宇宙ブーム時代の天体望遠鏡の愛好家（特に説明がない限り“望遠鏡愛好家”とする）が増えてきた。

その望遠鏡愛好家の私、自称“古スコマニア”と言っている。娘に言わせたら、ペンネームのガラクマとあわせて最低レベルにかっこ悪いらしい。確かに品格はあまり感じられないが、逆に私にはちょうど良い響きである。

望遠鏡やそれを作った人々、産業について知りたいが、研究と呼べる程のこともできない。ネット上にきっかけをみつけると、そこを広げ、泥臭く情報や望遠鏡を漁り、コミュニティに公開し網を張る。そこでまた新たなきっかけをみつける。そんな望遠鏡愛好者とのコミュニケーションの中で、新たな情報の発見を楽しむ自分を古スコマニアと呼びたい。

1-2 中二病

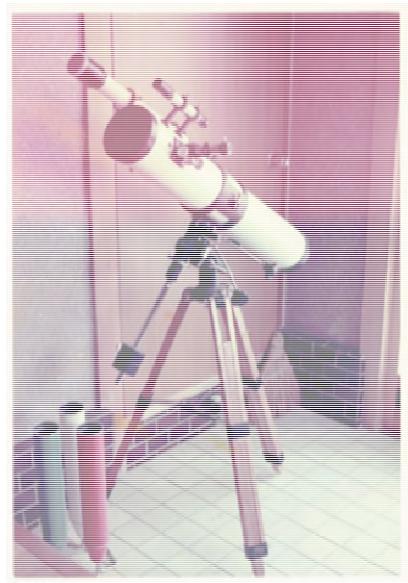
私も初めから古スコマニアではなかった。きっかけは忘れられない悲しい過去だ。

田舎で生まれた私は、何にでも興味津々。植物や昆虫、気象観察。見る

もの感じるものが興味の対象であった。その対象のひとつ、宇宙。連日の宇宙開発競争のニュースや、科学雑誌によって小学校高学年には、簡単に宇宙のとりこになっていた。当然一番欲しいものが天体望遠鏡。家は貧乏だが比較的教育熱心。初めに買ってもらったのがコルキットといって、紙の筒とレンズのキット。架台を自作し月などを覗いた。要求する観測をできるものではなかったが、面白く楽しく幸せだった。

新しい望遠鏡が欲しい！ その思いは日増しに強くなり、月一回出る天文雑誌を待ち望み、買って帰った日から毎日、穴のあくほど天体望遠鏡の広告を眺めた。経験は少ないが知恵だけは身に着けていたので、望遠鏡は口径（レンズや反射鏡の大きさ）が大きい程暗い星がよく見える。倍率には限界があって、倍率を上げてても良く見えるものではなく、口径によって有効な（倍率を上げていって新しく見えるものが増える）上限倍率が決まっている、程度の事は知っていた。また、望遠鏡を支える架台も重要であることを雑誌の情報で知った。残念だったのが、私の周りで望遠鏡を持っていたのは、買い与えられたものをもっていた徒弟だけだった。アドバイスをくれる経験者はいなかった。

そんな状況で選んだのは、ダウエル 12 cm 反射望遠鏡 LC 型。当時実績があり評判も良かった日野金属産業ミザール H-100 型や新鋭の高橋製作所 TS 式 1 型は、口径が 10 cm で 5 万円以上。ダウエル LC 型は口径が 12 cm で 45,000 円。他にダウエルにはほぼ同じ口径（114 mm）で 1 万円程安い



(図 1-1) ダウエル LC 型

モデルもあり、それに比較し架台も頑丈に見える。絶対良く見えて、架台も堅牢、通信販売で中華mmナー人が無いので安いんだ。地方の私には絶対狙いと疑わなかった。お金が貯まるのを待って中二の冬、注文し舞い上がっていた。

届いた後は、勉強もそっちのけで毎晩星を見、スケッチし、たまには近所の同級生を呼んで星を見せて喜んでした。それはそれで幸せな日々であった。すぐ先に悪夢が待っているとも知らず。

1-3 トラウマ

高校は地元の普通科。すぐ天体部に入った。新入部員は3人だったか、4人だったかよく覚えていない。ただ、熱心なのはS君と私の二人。入ってすぐに知ったのは、投稿写真が表紙になったとか、天文雑誌に写真が掲載される先輩が何人もいたこと。先輩方は強力であった。

ある日、S君と自分の望遠鏡を持ち寄って観測会をすることになった。S君は私が比較対象としていたTS式1型。55,000円、最近のセールでEr(エルフレ)広角接眼鏡、10,000円相当の接眼レンズをプレゼントというチャンスに買ったらしい。実質ほぼ同額。

まずは木星。一目みて愕然とした。今まで私の愛機では、2本の縞模様と僅かなその他の模様を、眼を凝らしてスケッチしていたが、S君の望遠鏡でみると、難なく4本以上細かな縞模様が明確に見える。差は歴然。次にM13球状星団。明確に見えるように倍率を下げ、私はH(ハイゲンス)30mm。便の底を覗くような狭い視界に白くモヤっとした星の固まり。周辺の星々も少ない。彼の望遠鏡、接眼レンズEr32mmでは、すっきりとした広い視界に、コントラスト高く星が分離し、今迄見たことが無かった球状星団。こちら差は歴然。

架台を操作した感覚も全く違い強固でスムーズ。同等と言えるところはどこにもなく、にっこりしたS君に、世間知らずだった私が恥ずかし

く、話す言葉がみつからなかった。

1-4 その後

強烈な体験をしたのちも、愛機を見捨てず大事にしたが、次第にダウエルから遠のき、高橋製作所の小型望遠鏡を購入し写真撮影を始めた。ますますのめりこみ、勉強部屋は密閉し暗室状態。晴れた夜は寝ない！おまげが遅刻年 100 回以上。ただ、不器用で頭でっかち、細かさに欠ける性格からか、たいした成果もなく酢酸臭（暗室の匂い）のなかで高校生活を終えた。

大学でも天文部。就職しても四国天文協会に入り天文マニアとしての趣味は継続したが、気になることが増え、次第に集中する時間は減っていった。

そして就職、転勤、結婚。当時、産業の米と言われた半導体産業の最前線で毎日午前様。同じ家で寝ても家族と会うのはたまの休日のみの生活。いつしか空を見上げる機会も減っていった。

1-5 転機

長男、長女が幼稚園に通うようになったころ、少ない休みに家族のきずなを深め、自然の良さを教えるには、と思い切ってキャンピングカーを買入。そうこうしているうちに 3 人目の次女が生まれ、住んでいた狭い社宅から、毎週のようにキャンプに出掛け、子供に星座を教え、小さな望遠鏡で月や土星を見せ、空を見上げる機会も増えた。

そして転勤。半導体産業が斜陽になり、自宅に近い本社に呼び戻されたのは 42 歳の時だった。

家に帰って一週間ほどたったある日、昔と同じように実家の玄関の段差に腰掛け夜空を見上げていると、突然前触れもなく、心の底から何か懐かしい感覚がフツフツと湧いてくるのを感じた。こんな感覚は経験し

たことがなかった。子供の頃から、高校時代この家で過ごした頃の思い出がフラッシュバック。草の匂いや、夜露の感覚とともに、一生懸命星の観測をした思い出と、多感な青春時代、進路の悩み、対人関係、好きだった彼女の顔が空に浮かび、消えてしまいたかった自己嫌悪、誰にも言えない恥ずかしさを、空に置いていった自分がた。当時は気がつかなかったが、天体観測はそういう思い出でもあったことに気がついた。

そしてその思い出のひとつ、ダウエルのトラウマ。よしもう一度星を見よう。と同時に、当時の天体望遠鏡への強い憧れが蘇った。

2. ガラクマ

2-1 HP「昔欲しかった天体望遠鏡」

帰郷した 2001 (H13) 年には、すでにネット社会が立ち上がっていた。プロバイダーが中心となり環境を整備し、HP 製作が流行っていた。

昔の望遠鏡の情報を調べる為に、それらの HP をまず漁った。当時ネットサーフィンという言葉が流行り、古老こと（ビクセン光学）斎藤彰氏のサイト等が人気だった。

ただすぐ気がついた。”情報は発信しないと貰えない”。当時は 2 ちゃんねるも人気だったが、匿名掲示板の情報は玉石混交。真偽を確認する術はない。そこで 2004 年自ら HP を立上げ、匿名 NG を要求した 2 チャン風マルチスレッド式掲示板を立ち上げた。ちょうどよい秀逸なフリーソフトがあり、2022 年の現在まで使用している。

その HP のタイトルは、ド直球「昔欲しかった天体望遠鏡」



(図 1-2) 当初(2005 年)の HP のトップ画面

2-2 ガラクタマニアからガラクマ

掲示板中心のHPは、当初から盛況、週末にはカウンターは1000/日以上カウントし、マルチスレッド掲示板で複数を話題が平行に進むようにしていたが、それでも整理がし辛くなり4つに拡大。

はじめ、ハンドルネーム「ガラクタマニア」と名のつた。昔から貧乏だった私は、有名メーカーの望遠鏡は当時から手が出ない諦めていたし、もともと一流、有名、信頼というのは苦手だった。それがトラウマを生んだ元凶でもあったが、それでも懲りて騙されても二流、三流の望遠鏡が好きだった。そんな自分をガラクタマニアと名乗ったのは個人的には違和感が無かった。ただ、いざ名乗ってみると、何の(ガラクタ)? と聞かれる。そこで、掲示板で募集した所、現在もごひいき頂いているコメトさんから「ガラクマ」との提案を頂き採用。ニックネームと認識され、古スコマニアのガラクタマニアという無意味に韻を踏んだゴロの悪さからも脱する事ができた。それからずっとガラクマである。



(図1-3) 「古スコ広場」、タイトルをクリックすると会話が開示する

2-3 HP「昔欲しかった天体望遠鏡」、誕生の功罪

2005年頃、SNSが無かった時代、パソコンやインターネットは今とは違ってお父さんたちのツールだった。夜な夜なおじさん達が、私のHPに群がり話が弾み、私ガラクマも調子にのって星も観ず、パソコンの前で寝落ちする日もあった。

仲間集め、情報収集の効果は、狙い以上の効果があった。古くからの天文愛好家は、天体望遠鏡が高額な時代を生き、天体望遠鏡自体に愛着を持っていた。その方たちは、地元の天文クラブに所属し、仲間内で情報交換するのが精一杯。都会の方は専門店からの情報があるが、地方ではあまりない。それがネットとHPで、天文クラブに属さない方や、業界関係者、今まで存在を知らなかった天体望遠鏡歴史研究家の方々の参加し、一挙に全国レベルとなった。また、海外サイトとの交流が始まり、日本製望遠鏡を愛し、集め、調べている天文愛好家が、世界にはたくさんおり、国内にない情報でも、海外にあることがあることも分かった。国内、海外の相乗効果で、未知の情報がたくさん掘り出された。

HPをベースとするリアルな交流も始まった。掲示板の常連さん、オープンなマニアが集まり、交流を持つようになった。今でも、多くの人たちと交流がある。

天体望遠鏡が好きだと、買って手元にもって確認したいという要求がある。これは他の趣味も共通で、私もコレクターとなっていた。当時は成熟していなかったオークションサイトでの中古天体望遠鏡は、過去の高級機を数千円で手で入れられることもあった。ところが、私の掲示板が公開されたころから、落札価格が上がり始め、特に稀なものに関しては加熱し始めた。コレクターが増えた為だが、仲間からは「HPができたから」と冗談で言われたりしていた。実際、そうかもしれない。功罪の罪の方である。

2.4 古スココレクター ガラクマ

マニアと言えばコレクター。何でも熱心になると、どうしてもそばに置きたい。道具なら手に取って調べてみたい。HPの仲間と共に、望遠鏡の数も増えてきた。高額な物は買えない。1000円から希少品でも数万円までのものを買ひあさった。10台、30台、50台・・・

6畳二間の自由にできる部屋は望遠鏡で埋まり、リビングや倉庫に進出。家族のブーイング、またはみんなにも見てもらいたいと、いつかは博物館を作ろうと思った。

2.5 環境カウンセラー ガラクマ

理由はいろいろあろうが、そこは割愛して、大学を出るころにはエンジニア、特に「町の発明家」といわれる人になりたいと思っていた。性分からして理系人間。まずは疑ってかかり、理屈が分からないと信用しない。覚えるのは苦手だった。そういうことで、それまでの仕事は半導体製造技術、半導体テスト装置開発等とエンジニア人生を歩んできたが、残念ながらCtoC業界。町の発明家には程遠かった。

そこに絶好のチャンス。社内で環境部門、環境分析や公害規制の化学測定部門に異動になった。お客さんは近隣の中小企業。それも全方位的好奇心のなかで、一番怪しく思っていたのが環境問題であった。公害問題のように原因と結果がはっきりしているものも、各国違う規制基準の理屈に納得できない。ましてや地球温暖化やエネルギー問題はなおさら。知らないと仕事もできないし、何と言っても自分なりに納得できないものは腹立たしい。それを、相談に来るお客さんに吹聴することは、もっとできない。

50歳を前に、猛然と？勉強を始めた。

大学は天文好きが高じて物理専攻だった。化学もいっしょだろという人はいるが、わたしにとって覚えることが多い化学は苦手であった。資格

も必要で、会社から帰って勉強も始めた。まずは、鈴木あきえちゃんのNHK 高校の化学にはまった。ただ、必要なレベルは高校レベルでは不足。NHK の放送大学、放送大学院の放送授業で勉強した。ただ、無料放送を見るだけではサボり気味になることも多くなった。そこで、お金を払い、もったいない意識を利用して、正式受講。多くのことに納得できるようになったが、どうも熱心な一部の環境活動家のいいぶんの根拠が納得できない。私なりに納得した環境問題の解釈を伝えたいと環境カウンセラーとなった。論文を書き、東京で面接を受けるのだが、個人的な主張で、ペットボトルはごみ焼却発電の助燃材として燃やす方がよい。とか主張したのが原因か落ちたりもした。当時はその主張はタブーだったが、現在はペットボトルの熱利用は環境省の方針にもなっている。

ものを作るのには、材料は元より大きなエネルギーが必要だ。リサイクルするのもそれを集めるトラックの燃料や、解体、選別を考えると、本当にリサイクルするのが得かよくわからないし、特という根拠も示されていない。ものは無いのが一番。あるものは使い続けることが、効果の不明確なりサイクルより、省エネ効果が明白である。

望遠鏡も捨てられるより、とりあえずは回収して保存。活用したいと考えた。

環境カウンセラーとなり、コレクターとしての目的も変わってきた。HP から少し遠ざかったが、掲示板はあい変わらず盛況。

その裏で環境カウンセラー ガラクマの活動が、静かにスタートをきった。

2.6 古スコマニア（古スコ研究者？）ガラクマ

情報を知り、蓄積し、残し、公開し、古スコ文化醸成することがライフワークと当時から思っていた。その為に HP で仕掛けを作り、掲示板（コミュニティ）を立上げて情報の蓄積までは計画通り、ただ、残し公

開するところ、特に文書化が苦手だ。論文や世間向けの文書を書きたい。

そこで、自分もちょっと騙す、へらこい(ずるい) 策略を思いついた。自分の好奇心を利用し、放送大学院の宇宙関係の研究室に入った。大学院の単位は、化学や他の教科で単位をとり、卒論として天体望遠鏡の歴史について書き、文書化を鍛えてもらおう。結局、教科単位を約6年かけてとり、2年かけて論文を作った。タイトルは「国産市販天体望遠鏡の黎明期に関する考察」。

それまで書けなかった文章が、稚拙ながら論文もかけるようになった。ただ、この活動はあまり進まず、これから仲間と「天体望遠鏡産業研究会」を立上げ進めることとしている。

2.7 活動をはじめて気がついた。

初めて自分で買った贅沢品。大事にしていた天体望遠鏡が粗悪品と分かった日から、トラウマを引きずって当時で約30年。

ただ、それを詳しく調べていくと、いろいろなことが分かってきた。

戦後復興の荒波にもまれた望遠鏡産業は、昭和30年代、宇宙ブームの到来と日本の高度成長期に入り、カメラや双眼鏡等とともに世界市場を席卷し、花開いた。

欧米の大企業に挑んだのは、町工場の親父さんや職人さんたち。欧米の機材を参考に試行錯誤する設計者。初めての大型レンズに四苦八苦のレンズ屋さん。小さなレンズを組み立てる手先の器用な接眼鏡屋さん。架台を作る鋳物屋さん。箱や三脚は木工屋、飲んだくれや頑固おやじ、庶民の力で世界から勝ち取ったのだ。

昭和の天体望遠鏡産業に関わる愛すべき人々の営みにたどり着いた。それが分かった時から、トラウマは懐かしい思い出になり、ゴミとなっていた粗悪品も愛しい収藏品となった。

3. 天体望遠鏡博物館

3.1 突然の電話

天体望遠鏡博物館の構想は、早くからHPで唱えていたことから、すでにいくつかの望遠鏡の寄贈を頂いていたりしていた。そういうこともあってか、私が中心になって現在の天体望遠鏡博物館を作ったと誤解している人も最近まで少なくなかった。実は違う。現村山代表理事が唱え集めた博物館である

2006の秋頃だったであろうか。オークションでも古スコに競合する方が増えてきた中、村山という人から突然電話をもらった。「古い望遠鏡を回収、保存する活動をしているのだが、一緒に活動しないか。」当時、村山（敬称略）のことは知らなかったが、二つ返事でOKした。あとで聞くと、オークションで競合することから調べて、私のHPからたどり着いたという事で、HPの仲間集めの効果のひとつということだった。

私が考えていた天体望遠鏡博物館の構想は定年後（2020年頃）からスタート。それも相当の資金と人集めに努力を必要とすることは予想されていた。それより早く仲間ができ、実現出来たら素晴らしい事と小躍りしたい程だった。

2007年、すでに村山と一緒に活動していた2名、計4名（すぐ1名追加参加）で任意団体「天体望遠鏡を文化遺産として残す会」を結成し、活動スタートした。

3.2 天体望遠鏡を文化遺産として残す会

当初、代表を決めるのに、村山から私にどうだと振られた。社交辞令と思いながら、とんでもないと断った。すぐ彼は某企業の社長で、かつ経済界では有名人であることを知った。間違っても受けることは無かつ

たが、後の村山のリーダーシップ集金力を知ると、私では現在の博物館は無かった。

村山は、京都と東京、香川と3つの生活拠点を持ち、倉庫を県内に借りていた。まずは、そこを拠点として博物館の候補地を探し始めた。香川県内とともに、徳島県からも誘致のアピールがあり、香川県で2、3か所。徳島県で3、4か所の下見に行ったのは覚えている。ただ、私が参加していない候補地見学も有ったかと思うと、10カ所くらいは候補地があったかもしれない。

その中で、さぬき市と地元の協力が頂ける多和小学校跡地に決まったのは、2012年だった。

3.3 一般社団法人 天体望遠鏡博物館

まだ候補地を探しながら、また望遠鏡の収集に精を出していた2010年10月、「天体望遠鏡を文化遺産として残す会」を「一般社団法人 天体望遠鏡博物館」に改称し法人化した。まずは残すことから始め、展示する事への意思表示ともいえる改称であった。

法人化については、活動に際し大型望遠鏡の引き取り相手が公的機関などの法人が多い為、以前から任意団体では役不足と考えており、社団法人化することになった。NPOも考えられたが、法人としての格や将来公益社団法人化も視野に入れることから、一般社団法人とした。

この辺りはメンバーに詳しいものがおり、特に口を挟むことは無かったが、対外折衝時に気分的にも楽になった。

昔から理系一本の仕事をしてきた私のようなものには、何ともメンバーが頼もしく思えた。

3.4 開館 天体望遠鏡博物館

2016年3月開館した。代表の人脈で著名な先生方の参加で、華々しい

セレモニーが開催された。

私も開館に合わせ私も50台ほどの小型天来望遠鏡を寄贈した。それまで収集してきたり、メンバーの寄贈で150台ほどのスタートだったように記憶する。その後の活動は天体望遠鏡博物館の活動については公式HPを参考にして頂きたい。

3-5 運営と私の役目

開館の準備期間から、中、大型望遠鏡の解体搬出を行った。大型自動車免許をもつこともあり、率先し遠征に参加した。その為に玉掛け講習も受けた。関東から九州まで多くの中、大型天体望遠鏡の解体搬出に関与し、また、寄贈者からの情報や、集めていた同型機やメーカーの情報から展示パネルの作成も行う。

一方、館内ガイドを行うボランティアとしての活動も行っている。だいたい運営も含め全員がボランティア、もちろん交通費も出ないが、逆に会費は必要、という条件ながら現在も100名程の登録がある。多くは退職後の比較的時間がある人ではあるが、激務の時間を割いて参加する熱心な方も多い。ただ、私はサボり気味ではある。

現在は後で述べる「古スコサービス」の関係で、理事を退き運営に関する権限はない。ただ顧問、ボランティア会員としての活動は続けている。

4. 古スコサービス

4-1 思い

昔憧れた望遠鏡が、リサイクルセンターに持ち込まれ、欠品と破損で落札されず廃棄される現実を見ると、悲しくなる。整備され 50 年前の自分の手に渡ったとしたら、舞い上がってしまうだろう。どんなに幸せなものかと思う。環境カウンセラーの私も、そう思う。

このような意味で、中古望遠鏡を利用することができないかと、常常思っていた。捨てられない、という意味で天体望遠鏡博物館の設立は良かった。天体望遠鏡博物館には毎年数十台の望遠鏡の寄贈がある。それらは廃棄処分の憂き目からは脱したのだ。歴史的な展示として活用されるものもあるが、実用として活用する方がいいものもある。いい望遠鏡はベストセラーとして数多く集まる。ただ、これだけの多くの望遠鏡は、博物館として活用しきれない。

次のステップとしては有効利用である。

4-2 きっかけ

2021 年 40 年程働いた会社を退職した。62 歳、スモールスタートできる起業を目指していた。思いを実現する為だ。

このような活動は急ぎ過ぎないことだ。アイデアの実現性を確認する為にプログラミング教室に通い、自分でどれだけできるか計った。アプリ制作はできないことが分かったが、仲間ができた。次に小さなビジネスコンペにアイデアを提出し、最優秀賞をもらい。アイデアの実現に後押しを頂いた。

4-3 古スコサービス スタート

2022年7月個人事業登録、屋号「古スコサービス」を申請した。古物商、古物せり斡旋業の申請に手間取った。

まずは中古天体望遠鏡を有効利用できるようにするには何が必要か？流通はオークションサイトを立ち上げることでよい（と言っても難しい）。ここから薄く活動資金を得たい。修理を自分でするには補修部品の供給や、マニュアルや完成見本が必要だ。また、自分で修理できないものは修理業者への斡旋も考えないといけない。

それぞれを並行で、ゆっくり準備を開始している。ただなぜか開始直後から、骨折や脳梗塞、腫瘍摘出手術など、突然のピンチが続いている。前途多難を予見されるものでないのを願う。この冊子が発行されることには、ひととおりの処置は終わり、元気に活動しているものと期待したい。

皆様、ご支援、ご協力よろしく願いいたします。